

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

人生観・世界観を変えた1週間 －東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科での国内研修－

山口大学大学院医学系研究科 消化器・腫瘍外科学

鈴木 有十夢

この度、日本臨床外科学会の国内外科研修制度により、2025年8月4日から8月8日までの1週間、東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科において国内研修の機会を賜りました。まず、このような大変貴重な機会をあたえてくださいました、日本臨床外科学会の万代恭嗣会長ならびに国内外科研修委員会の高山忠利委員長に深く御礼申し上げます。そして、快く研修を受け入れていただいた東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科の長谷川潔教授をはじめ、日本臨床外科学会の事務局を通じて丁寧に連絡を取ってくださった高本健史先生、研修中に熱くご指導をいただいた河口義邦先生、風見由祐先生、関裕介先生、そして医局員の先生方に心より感謝申し上げます。

今回、私が東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科での研修を希望した理由は、同科が日本屈指の肝胆膵外科疾患のhigh volume centerであるとともに、近年、minimally invasive surgery (MIS) の分野で凄まじい業績をあげられていることを学会発表や論文を通じて拝見し、是非直接この目で見てみたい!! と強く思ったことが理由です。結論から言うと、今回の研修を医師8年目の現時点で経験できたことは、洗練された手術手技を見学・習得することにとどまらず、同科が有する哲学や精神を学び取ることにつながり、私の人生観・世界観を大きく揺さぶる機会となりました。

東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科では手術日は月・水・金曜日に行われ、カンファレンスは火・木曜日に行われていました。カンファレンスは英語で実施され、国外からの留学生も複数参加されており、活発かつ高度な議論に触れる中で、日常的に英語を用いることの重要性を改めて実感いたしました。私は河口義邦先生率いるチームに配属していただき、ロボット支援下膵頭十二指腸切除術1例、残膵全摘術1例を見学させていただきました。手術に際しては、体位、ポート配置、使用するデバイス、切除のアプローチ手順、再建手技に至るまで、その瞬間ごとに要点を惜しみなく解説していただきました。また、手術前日にご教示いただいた河口先生の論文 (Clockwise Devascularization Technique) が実際の術野で忠実に再現されていることに感銘を受け、手術手技、術式を言語化することの教育的意義を強く再認識いたしました。また印象的だったのは、左手を場面に応じて主体的に用い、右手と同等の繊細さで剥離・切離を行う操作でした。今まで、右手を優位鉗子として剥離・切離に、左手を非優位鉗子として場の展開に使用することが多く、常識として「これが当たり前だ」と思って教わって来たので、従来の自分の固定観念を覆す「目から鱗」の体験でした。これはwebの手術動画や文献からは決して得られない、実地でのみ得られる生きた知識として深く心に刻まれました。(あの日からご飯を左手で食べて、来るべき日に備えて特訓を重ねております。)

さらに、同科のMISチームが立ち上げからわずか数年で確立された安定した成績を維持されている点にも驚嘆いたしました。肝切除術は術後3日、膵体尾部切除術で術後4日、膵頭十二指腸切除術は術後5日で退院という極めて短い在院日数を可能にしているのは、膨大なデータ解析によって裏打ちされた確固たるエビデンスに基づく術後管理であり、術後早期経口摂取や緻密なドレーン管理といった革新的な取り組みに深い感銘を受けました。また、私と同世代の先生方が術者・部分術者、第一助手として残膵全摘やロボット手術に携わる姿を目の当たりにし、負けてられない、と大きな刺激と勇気をいただき

ました。

研修期間中に脳死肝移植の見学機会も賜りました。深夜3時頃に東大の手術室に入らせていただき、レシピエントの全肝摘出、バックテーブルにおける脈管形成、さらには脈管再建に至るまで一連の流れが極めてスムーズに展開され、夢中で没頭して見学したせいもあってか脳死肝移植手術という高難度手術が一瞬で終わったように感じられました。私自身、肝移植の知識・経験は非常に乏しい面があり、一連の流れ、脈管再建方法の技術など大変勉強になりましたが、移植班の先生から「肝胆膵外科治療に携わる以上、肝移植を特別な治療として捉えてはならない。」という言葉は強く心に残っております。

最終日は長谷川教授執刀のHPDを間近で拝見するという、貴重な経験を得ました。手術既往、再建既往のある超高難度のHPDでしたが、繊細かつ緻密な剥離操作で手術が止まることなく綺麗に進んでいくのを見て、感動を覚えるとともに、いつかこの手術・技術を超えたいと思い、一挙一動を目に焼き付けました。

今回、日本最高峰の施設であります東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科で研修をさせていただき、1週間という短い期間ではございましたが、手術はもちろんのこと、カンファレンス、術後管理など何を取っても生涯忘れられない、刺激的で貴重な経験となりました。また、食事を一緒にさせていただく機会も賜り、医局員の方々が優しく温かく迎え入れてくださりとても嬉しかったです。改めまして、東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科の先生方皆様に心より感謝を申し上げます。最終日の夜に、河口義邦先生に「目の前の常識は本当なのかを日々考えることが大切。目の前にある患者さんのoutcomeを当たり前と思わず、改善は可能なのか？改善するにはどうしたらいいのか？Clinical Questionは毎日の目の前にあるよ。」と教えていただいたことが、金言として心に残っております。手術手技のみならず、考え方・哲学に感銘を受けて、僭越ながら師匠と思っております。自分も精一杯精進して、いつの日か同じ土俵で患者さんのより良い医療のために少しでも貢献できたらと思っております。

最後に、本研修に私をご推薦いただいた当科の永野浩昭教授、山口県臨床外科学会支部長の山本達人先生、快く送り出してくださり、研修中の業務を支えてくださいました山口大学の皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

